

静岡県知事賞

僕の背中にある勇氣

静岡県立浜松西高等学校 中等部 三年

宮本 諒太郎



朝早く友達と通学路を歩いていると、いつもは静かなゴミ捨て場に人影を見つけた。一人はおばあさんと、もう一人は僕の学校の高等部の先輩だった。少し面倒くさそうな予感があったが、やはり二人はカラスに荒らされたゴミ捨て場の掃除をしていた。高校の先輩は学校のちりとりを持っていたので、一度学校に行き、戻ってきたようだ。僕はためらったが、そのまま横を通り過ぎるわけにもいかなないので、友達と「手伝います」と声を掛け、掃除を手伝った。その日の朝の会で、僕たちの行動が

紹介された。名前こそ出されなかったが、おばあさんが学校へ連絡をしてくださったそうだった。僕は少し恥ずかしかったが、あそこで通り過ぎずに掃除を手伝った自分をほめたいと思った。カラスによるゴミ荒らしは決まったことなので、今度は僕が友達を誘ってゴミ捨て場の掃除をすることにした。友達も快く引き受けてくれた。そうして僕たちは、毎朝の掃除を習慣として続けていた。すると、その活動に学校の近所の誰かが気付いてくれたようで、また朝の会で紹介された。同級生の間でも

話題になっていったようだ。色々な人から、「すごいな」「えらいじゃん」と褒められた。

しかし、僕はあまりいい気がしなかった。「本当にこれは褒められるようなことなのか」と思ったのだ。初め、ゴミ捨て場の掃除を手伝った時は、ためらいはあろうと、「するべき」と思ったから手伝いをした。しかし、今、僕をしている行動は、褒められたいだけの上っ面だけの行動ではないか。いわゆる「偽善」なのではないか、と思ったのだ。そして、そのときから、僕はゴミ捨て場の掃除をしなくなった。

掃除を辞めた週、いつもより一本遅いバスで登校すると、ゴミ捨て場に人影があった。友達が掃除をしてきているのだろうと思ったが、それだけでは無かった。そこで友達と掃除をしてきていたのは、今まで見たことのない顔の人たちだった。次のゴミの日には、また違う人が二人ほど、そして翌週になると近隣の小学校の先生まで手伝ってくれるようになった。僕たちの行動が周りの人たちの気持ちを変えたのだと思った。

僕は自分が悩んでいることが、どうでも良いことだと気付いた。善だろが偽善だろが、僕たちが行動を起こしたことに意味があるのではないか。偽善を気にせずやってのける「勇気」が大切だったのではないか。そう思いながら、掃除を手伝った。今、僕の背中の通学カバンには、四十五リットルのゴミ袋が

入っている。学校がくれるようになったので必要ではないのだが、いざというとき、きつとこのゴミ袋が僕に勇気をくれる。そして、その「勇気」が、僕や周りの人たちの気持ちをつないでくれると信じている。

